2010 年度 修了

協同学習を伴うプロジェクト型 PBL のための環境設定
―相互依存型集団随伴性を活用したチーム運営―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
乾　明紀

キーワード：アクティブ・ラーニング, Project-based learning, 相互依存型集団随伴性

大学がこれまでの「何を教えるか」を中心とした教育から，学生が「できるようになる」ことを重視するパラダイムシフトの中で，学生をアクティブ・ラーナーにするプロジェクト型 PBL への期待は大きい。本研究では，協同学習の伴うプロジェクト型 PBL を実践するための環境設定について検討した。

筆者が担当するプロジェクト型の演習科目を受講する学生 9 名で組織された，「アートオークション（芸術作品競売会）」プロジェクトを企画・運営するプロジェクトチームを対象に，4 月から 11 月までのプロジェクト活動中の相互依存型集団随伴性を高めるための環境設定（教育支援としての介入）をおこなった。主な環境設定は次の 4 つである。1）楽しいテーマで話し合うワークショップの実施，2）チーム全員による作品収集活動，3）ブログ更新継続のための促し，4）「週間予定報告シート」，「週間活動結果報告シート」のメンバー間の確認。これらを独立変数として，その効果を測定した。

結果ついては，1）チームの情報共有のために開設したメーリングリスト（以下 ML）の投稿数は安定的に増加した。2）作品募集のためのブログ投稿数は，上記の設定をおこなわなかった前年度より改善された。3）ブログ投稿数は，全体を通しては前年度を上回るブログ投稿があったが，作品募集の際に大きく増加した投稿数を維持することはできなかった。4）夏季休暇中の学生の ML 投稿数は，前期授業期よりも上昇した。出席率は前期授業期よりはやや低下しているが，前年度の夏季休暇中の出席率と比較すると大きく改善されている。また，後期授業期の出席率も前年度より高くなった。

この結果から次のように考察した。チーム結成直後に，楽しいテーマのコミュニケーションという仲間の受容を高める介入が，相互依存型集団随伴性を機能させ，標的行動である ML 投稿を増加させた。また，この過程において，チーム内の社会性や仲間の相互交渉が促進され，チーム全員による作品収集活動の際には，目標達成に必要なブログ投稿がチームへの協力行動として自発した。その後ブログ投稿については，依存型集団随伴性の特徴を見せたが，個人随伴性が強化されやすい夏季休暇中にも対面のコミュニケーションを継続することで，相互依存型集団随伴性が機能し，出席率は前年度より改善され，ML 投稿数は増加した。このように夏季休暇中にも関わらず学生はアクティブにプロジェクト活動に参加した。よって，相互依存型集団性随伴性によるチーム運営が，プロジェクト型 PBL に必要な協同学習行動を増加させることに効果的であることが明らかになった。